木曽の最期

要旨

木曽殿は討ち死にを覚悟して巴を逃がし、気弱な言葉を漏らしながらも、今井四郎に励まされて名誉の自害をしようとするが、泥田に馬の足を取られて敵に討たれる。それを見て、今井は壮烈な自害を遂げる。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P88・13〈落ちにけり。〉	木曽殿は、堂々の名乗りを上げて、敵の大軍に攻め入り、縦横に駆け割って闘った。三百余騎が五騎になってしまうまで、巴は戦い抜いたが、木曽殿の命令で東国へ落ちて行った。
第二	P88・14〈今井四郎〉〜P90・9〈駆け給ふ。〉	木曽殿は、今井と二騎だけになって、ふと気弱な言葉を漏らすが、今井は、木曽殿を励まして、名誉の自害を勧める。今井と一緒の討ち死にを願った木曽殿だったが、今井の懇願で、自害するべく粟津の松原へ向かう。
第三	P90・10〈今井四郎〉〜P91・8〈手も負はず。〉	今井は、自害する木曽殿を援護するために、ただ一騎で敵を迎え打ち、最後の奮闘をし続けるのだった。
第四	P91・9〈木曽殿は〉〜終わり	木曽殿は粟津の松原へ向かうが、深田に馬の脚を取られて、今井のほうを振り返ったところを、石田の次郎主従に討たれてしまう。それを見て、今井は壮烈な自害を遂げた。

品詞分解と現代語訳

①木曽左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧着て、鍬形打つ
代｜格助・体修｜格助・体修｜格助・体修｜係助・区別｜格助・体修｜格助・資格｜係助・区別｜格助・体修｜格助・体修

たる甲の緒締め、いかもの作りの大太刀はき、石打ち
存体｜格助・体修｜格助・体修｜マ下二・用｜格助・体修｜格助・体修｜カ上一・用｜接助・単接｜カ四・用

の矢の、その日のいくさに射て
格助・体修｜格助・同格｜代｜格助・体修｜格助・体修｜格助・時間｜ヤ上一・用｜接助・単接

少々残つたるを、頭高に負ひなし、重籐の弓持つ
副｜ラ四・用(促音)｜存・体｜格助・対象｜形動ナリ・用｜サ四・用｜格助・体修｜タ四・用(促音)

て、聞こゆる木曽の鬼葦毛と いふ馬の、きはめて
接助・単接｜ヤ下二・体｜格助・体修｜格助・引用｜八四・体｜格助・同格｜副

太う たくましい に、黄覆輪の鞍置いて ぞ
形ク・用(ウ音)｜形シク・体(イ音)｜格助・対象｜格助・体修｜カ四・用(イ音)｜接助・単接｜係助・強意(係)

乗つ たり ける。②鐙踏ん張り立ち上がり、大音声を上げ
ラ四・用(促音)｜存・用｜過・体(結)｜ラ四・用｜ラ四・用｜格助・対象｜ガ下二・用

て 名乗り ける は、
接助・単接｜ラ四・用｜過・体｜係助・提示

「昔は 聞き けん ものを、木曽の冠者、今は 見る
係助・区別｜カ四・用｜過推・体｜接助・逆確｜格助・体修｜係助・区別｜マ上一・終

らん、左馬頭兼伊予守朝日の将軍源義仲 ぞ や。甲斐の
現推・終｜係助・強意｜間助・呼掛｜格助・体修

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①木曽左馬頭は、その日の装束として、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧を着て、鍬形を打ち付けた甲の緒を締め、いかもの造りの大太刀を腰につけ、石打ちの矢で、その日の戦で射て少しだけ射残したのを、背に高々と負って、重籐の弓を持って、名だたる木曽の鬼葦毛という馬で、極めて太くたくましいのに黄覆輪の鞍を置いて乗っていた。②鐙を踏ん張って立ち上がり、大音声を上げて名乗って言うには、

「昔は（うわさに）聞いたことだろうが、木曽の冠者を、今は（目の当たり）見ているであろう、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲であるぞ。甲斐

一条次郎（いちでうのじらう）と　こそ　聞け（き）。　互ひに（たがひに）　よい　敵（かたき）ぞ。　義仲（よしなか）

格助・引用　係助・強意（係）　カ四・已・結　副　形ク・体（イ音）　係助・強意

討つ（う）　て　兵衛佐（ひやうゑのすけ）　に　見（み）せよ　や。」

タ四・用（促音）　接助・単接　格助・対象　サ下二・命　間助・呼掛

とて、をめい　て　駆（か）く。　③一条次郎（いちでうのじらう）、

格助・引用　カ四・用（イ音）　接助・単接　カ下二・終

「ただ今（いま）　名乗（なの）る　は　大将軍（だいしやうぐん）　ぞ。　あます　な　者（もの）ども、　もらす

副　ラ四・体　係助・提示　係助・強意　サ四・終　終助・禁止　サ四・終

な　若党（わかたう）、討（う）てや。」

終助・禁止　タ四・命　間助・呼掛

とて、大勢（おほぜい）　の　中（なか）　に　取りこめ　て、　我（われ）　討つ取ら（とら）　ん　と

格助・引用　格助・体修　格助・場所　マ下二・用　接助・単接　代　ラ四・未　意・終　格助・引用

ぞ　進（すす）み　ける。　④木曽三百余騎（きそさんびやくよき）、六千余騎（ろくせんよき）　が　中（なか）　を　縦（たて）さま、

係助・強意　マ四・用　過・体（結）　格助・体修　格助・経場

横さま、蜘蛛手（くもで）、十文字（じふもんじ）　に　駆け割つ（かけわ）　て、　後ろ（うし）　へ　つつと

格助・状態　ラ四・用（促音）　接助・単接　格助・方向　副

出で（い）　たれ　ば、　五十騎（ごじつき）　ばかり　に　なり　に　けり。　⑤そこ

ダ下二・用　完・已　接助・順偶　副助・程度　格助・変化　ラ四・用　完・用　過・終　代

を　破つ（やぶ）　て　行く（ゆ）　ほど　に、　土肥二郎実平（とひのじらうさねひら）、二千余騎（にせんよき）　で

格助・対象　ラ四・用（促音）　接助・単接　カ四・体　格助・時間　格助・手段

支へ（さき）　たり。　⑥それ　を　も　破つ（やぶ）　て　行く（ゆ）　ほど　に、

ハ下二・用　存・終　代　格助・対象　係助・同類　ラ四・用（促音）　接助・単接　カ四・体　格助・時間

あそこ　で　は　四（し）、五百騎（ごひやくき）、ここ　で　は　二（に）、三百騎（さんびやくき）、百四（ひやくし）、

代　格助・場所　係助・区別　代　格助・場所　係助・区別

の一条次郎と聞いた。互いにとってよい相手だぞ。義仲を討ち取って兵衛佐に見せよ。」

と言って、大声で叫んで馬を走らせる。

③一条次郎は、

「今名乗ったのは大将軍だぞ。逃がすなよ者ども、討ちもらすな若党よ、討ち取れ。」

と言って、（義仲勢を）大勢の中に取り囲んで、我こそ討ち取ってやろうと思って進んで来た。④木曽の三百余騎は、（敵の）六千余騎の中を縦に、横に、八方に、十文字にと駆け破って、（敵の軍勢の）後ろへつっと抜け出たところ、五十騎ほどになってしまった。⑤そこを打ち破って進んで行くうちに、土肥二郎実平が、二千余騎で敵を防ぎ止めている。⑥それをも打ち破って（進んで）行くうちに、あちらでは四、五百騎、こちらでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ほどの（敵の）中を駆け破り駆け破りして行くうちに、（義仲勢は）主従五騎になってしまった。⑦（その）五騎のうちまで巴は討たれなかった。⑧木曽殿は、

五十騎、百騎ばかりが中を駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。⑦五騎がうちまで巴は討たれざりけり。⑧木曽殿、

「おのれは、疾う疾う、女なればいづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、言はれん事も係助・区別 形ク・用(ウ音) 形ク・用(ウ音) 断・已 接助・順理 代 格助・方向 格助・対象 ラ四・未 接助・順仮 格助・対象 サ変・未 推・已 接助・順理 格助・主格 格助・時間 格助・体修 係助・同類 ラ変・体 適・未 打・終 副助・例示 八四・未 受・未 仮・体 尊・用(敵→義仲) 存・用 過・終

しかるべからず。」

と のたまひけれども、なほ落ちも行かざりける が、あまりに言はれ奉つて、

「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさし て見せ奉らん。」

係助・逆確 副 八四・未 受・用 補動・ラ四・用(促音)(謙)語り手→義仲 接助・単接 格助・引用 八四・用(尊)語り手→義仲 過・已 接助・逆確 副 タ上二・用 係助・強意 カ四・未 打・用 過体 感 形ク・未 婉・体(ウ音) 終助・願望 格助・体修 サ変・用 接助・単接 サ下二・用 補動・ラ四・未(謙)巴→義仲 意・終

「そなたは、早く早く、女なのだから、どこへでも（落ちて）行け。私は討ち死にしようと思うのだ。もし人手にかかるならば自害をするつもりだから、木曽殿が最後の戦に、女を連れていらっしゃっていたなどと、言われるとしたら、そんなこともよろしくないだろう。」

とおっしゃったけれども、（巴は）なおも落ちて行かなかったが、あまりに（何度も）言われ申して、

「ああ、戦うにふさわしいような敵がいてほしい。最後の戦をしてお見せ申し上げよう。」

とて、控へ　たる　ところ　に、　武蔵の国　に　聞こえ　たる　大力、
格助・引用　八下二・用　存・体　格助・場所　格助・場所　ヤ下二・用　存・体
恩田八郎師重、三十騎　ばかり　で　出で来　たり。　⑨巴、　その　中
格助・引用　副助・程度　格助・状態　カ変・用　完・終　代　格助・体修
へ　駆け入り、　恩田八郎　に　押し並べ　て、　むずと　取つ
格助・方向　ラ四・用　格助・対象　バ下二・用　接助・単接　副　ラ四・用(促音)
て　引き落とし、　わが　乗つ　たる　鞍　の　前輪　に
接助・単接　サ四・用　代　格助・主格　ラ四・用(促音)　存・体　格助・体修　格助・対象
押しつけ　て、　ちつとも　はたらかさ　ず、　首　ねぢ切つ　て　捨て
カ下二・用　接助・単接　副　カ四・未　使・未　打・用　ラ四・用(促音)　接助・単接　タ下二・用
てんげり。　⑩その　の　後、　物の具　脱ぎ捨て、　東国　の　方
連語(完・用(撥音)＋過・終)　代　格助・体修　タ上二・用　係助・強意(係)　カ四・体(結)　タ下二・用　格助・体修
へ　落ち　ぞ　行く。　⑪手塚太郎　討ち死にす。　手塚別当　落ち
格助・方向　タ上二・用　係助・強意(係)　カ四・体(結)　サ変・終　タ上二・用
に　けり。
完・用　過・終

⑫今井四郎、　木曽殿、　主従　二騎　に　なつ　て
格助・変化　ラ四・用(促音)　接助・単接

のたまひ　ける　は、
八四・用(尊・語り手→義仲)　過・体　係助・提示

「日ごろ　は　何と　も　おぼえ　ぬ　鎧　が　今日　は
係助・区別　代　格助・引用　係助・強意　ヤ下二・未　打・体　格助・主格　係助・区別

重う　なつ　たる　ぞ　や。」
形ク・用(ウ音)　ラ四・用(促音)　完・体　係助・強意　間助・詠嘆

と言って（馬を）とどめている所に、武蔵の国で有名な剛力の武者、恩田八郎師重が、三十騎ほどで出て来た。⑨巴は、その中へ駆け入って、恩田八郎に（馬を）押し並べて、むんずとつかんで引き落とし、自分が乗っている（馬の）鞍の前輪に押さえつけて、全く身動きさせずに、首をねじ切って捨ててしまった。⑩その後、鎧甲を脱ぎ捨てて、東国の方へ落ちて行った。⑪（生き残りの五騎のうち）手塚太郎は討ち死にした。手塚の別当は落ちて行った。

⑫今井四郎と義仲とが、主従二騎だけになって、（義仲が）おっしゃったことには、

「これまではなんとも思わない鎧が、今日は重くなったことだ。」

今井四郎　申し　ける　は、
サ四・用(謙)語り手→義仲　過・体　係助・提示

「御身　も　いまだ　疲れ　させ　給は　ず。　御馬　も　弱り　候は　ず。　何に　よつ　て　か、　一領　の　御着背長　を　重う　は　おぼしめし　候ふ　べき。　それ　は　御方　に　こそ　さ　は　候は　ね　ば、　臆病　で　兼平　一人　候ふ　とも、　余　の　武者　千騎　と　おぼしめせ。　矢　七つ　八つ　候へ　ば、　しばらく　防ぎ矢　つかまつら　ん。　あれ　に　見え　候ふ、　粟津の松原　と　申す。　あの　松　の　中で　御自害　候へ。」
係助・列挙　副　ラ下二・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・未(尊)→義仲　打・終　係助・列挙　副　ラ四・用　補動・八四・未(丁)→義仲　打・終　代　格助・対象　ラ四・用(促音)　接助・理由　係助・反語(係)　格助・対象　形ク・用(ウ音)　係助・強意　サ四・用(尊)→義仲　格助・主格　格助・場所　係助・提示　格助・理由　係助・強意(係)　副　係助・強意　八四・終(謙)→義仲　接助・逆仮　八四・已(下)→義仲　格助・引用　サ四・命(尊)→義仲　格助・体修　補動・八四・已(結)→義仲　サ四・用(尊)→義仲　打・已　接助・順理　当・体(結)　代　係助・提示　補動・八四・終(丁)→義仲　格助・体修　補動・八四・未(丁)→義仲　係助・列挙　過・体　係助・提示　サ四・用(謙)語り手→義仲　接助・順理　副　ラ四・未(謙)→義仲　意・終　代　格助・方向　ヤ下二・用　格助・引用　サ四・終(謙)→義仲　代　格助・体修　格助・体修　格助・場所　格助・引用　タ四・用(促音)　接助・単接　カ四・体　八四・命(丁)→義仲　格助・時間　副　格助・体修

（と言ったので、）今井四郎が申したことには、

「お体もまだお疲れになってはいらっしゃいません。御馬も弱ってはおりません。どうして（僅か）一領の御着背長を重いとお思いになるはずがありましょうか。それは、お味方にご軍勢がおりませんので、気後れからそのようにお感じになるのでしょう。兼平一人だけがいるとしましても、他の武者が千騎だとお思いください。（私には）矢が七、八本残っておりますので、しばらく防ぎ矢をいたしておりましょう。あそこに見えておりますのは、粟津の松原と申します。あの松林の中で御自害なさってください。」

と言って、（馬に）鞭打ってゆくうちに、また新手の（敵の）武者が五十騎ほど出てきた。

ばかり　出で来たり。
副助・程度　カ変・用　完・終

⑬「君は　あの　松原へ　入らせ
係助・区別　代　格助・体修　格助・場所　ラ四・未　尊・用（兼平→義仲）

給へ。　兼平は　この　敵　防ぎ　候は　ん。」
補動・八四・命（尊）兼平→義仲　係助・区別　代　格助・体修　ガ四・用　補動・八四・未（丁）兼平→義仲　意・終

と　申し　けれ　ば、　木曽殿　の　たまひ　ける　は、
格助・引用　サ四・用（謙）語り手→義仲　過・已　接助・順偶　八四・用（尊）語り手→義仲　過・体　係助・提示

「義仲　都　にて　いかにも　なる　べかり　つる　が、　これ　まで
格助・場所　副　ラ四・終　当・用　完・体　接助・逆確　代　副助・範囲

逃れ来る　は、　なんぢ　と　一所　で　死な　ん　と　思ふ　た
カ変・体　係助・区別　代　格助・相手　格助・場所　ナ変・未　意・終　格助・引用　八四・体

め　なり。　ところどころ　で　討たれ　ん　より　も、　ひとところ
断・終　格助・場所　タ四・未　受・未　婉・体　格助・比基　係助・強意

で　こそ　討ち死に　を　も　せ　め。」
格助・場所　係助・強意（係）　格助・対象　係助・強意　サ変・未　意・已（結）

と　て、　馬　の　鼻　を　並べ　て　駆け　ん　と　し
格助・引用　格助・体修　格助・対象　バ下二・用　接助・単接　カ下二・未　意・終　格助・引用　サ変・用

給へ　ば、　今井四郎　馬　より　飛び降り、　主　の　馬
補動・八四・已（尊）語り手→義仲　接助・順理　格助・起点　ラ上二・用　格助・体修

の　口　に　取りつい　て　申し　ける　は、
格助・体修　格助・対象　カ四・用（イ音）　接助・単接　サ四・用（謙）語り手→義仲　過・体　係助・提示

「弓矢取り　は、　年ごろ、　日ごろ　いかなる　高名　候へ　ども、
係助・提示　形動ナリ・体　八四・已（丁）兼平→義仲　接助・逆恒

⑬（兼平は）「御主君はあの松原へお入りください。兼平はこの敵を防いでおりましょう。」

と申し上げたところ、木曽殿がおっしゃるには、

「義仲は都でどのようにでもなるはずであったが、これまで逃れてきたのは、お前と同じ所で死のうと思うからなのだ。別々の所で討たれるよりも、同じ場所で討ち死にをもしよう。」

と言って、（兼平と）馬の鼻を並べて（敵に向かって）駆け入ろうとなさるので、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口に取りついて申し上げたことには、

「弓矢取りというものは、長年常日頃どのような手柄を立てておりまして

最後　の　とき　不覚し　つれ　ば、　長き　きず　に　て
格助・体修　サ変・用　完・已　接助・順恒　形ク・体　断・用　接助・単接

候ふ　なり。　御身　は　疲れ　させ　給ひ
補動・八四・体(丁)兼平→義仲　断・終　係助・区別　ラ下二・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・用(尊)兼平→義仲

て　候ふ。　続く　勢　は　候は　ず。　敵　に
接助・単接　補動・八四・終(丁)兼平→義仲　カ四・体　係助・区別　八四・未(丁)兼平→義仲　打・終　格助・受対

押し隔て　られ、　言ふかひなき　人　の　郎等　に　組み落とさ　れ
タ下二・未　受・用　形ク・体　格助・体修　格助・受対　サ四・未　受・未

させ　給ひ　て　討た　れ　させ
尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・用(尊)兼平→義仲　接助・単接　タ四・未　受・未　尊・用(兼平→義仲)

給ひ　な　ば、　『さばかり　日本国　に　聞こえ　それがし
補動・八四・用(尊)兼平→義仲　完・未　接助・順仮　副　格助・場所　ヤ下二・未　連語(格助・対象＋係助・強意)　代

させ　給ひ　つる　木曽殿　を　ば、　なんど
尊・用(敵)→義仲　補動・八四・用(尊)(敵)→義仲　完・体　格助・体修

が　郎等　の　討ち　奉つ　たる。』　ただ
格助・主格　タ四・用　補動・ラ四・用(促音)(謙)(敵)→義仲　完・体　副助・例示

申さ　ん　こと　こそ　口惜しう　候へ。
サ四・未(謙)兼平→義仲　婉・体　係助・強意(係)　形シク・用(ウ音)　補動・八四・已(結)(丁)兼平→義仲

あの　松原　へ　入ら　せ　給へ。」
代　格助・体修　格助・方向　ラ四・未　尊・用(兼平→義仲)　補動・八四・命(尊)兼平→義仲

と　申し　けれ　ば、　木曽、
格助・引用　サ四・用(謙)語り手→義仲　過・已　接助・順理

「さらば。」
接

も、最後のときに不覚をとってしまうと、いつまでも（お名前の）傷となるものです。お体はお疲れになっております。（後に）続く（味方の）軍勢はおりません。敵に（私との間を）押し隔てられ、取るに足らない郎等ふぜいに組み（馬から）落とされなさって、討たれておしまいになったなら、『あれほど日本国に有名でいらっしゃった木曽殿をば、誰それの郎等がお討ち取り申した。』などと（世間で）申すようなことは、残念至極でございます。まっすぐあの松原にお入りになってください。」

と申し上げたので、木曽は、

「それならば。」

と て、　粟津の松原へ　ぞ　駆け　給ふ。
格助・引用　格助・方向　係助・強意（係）　カ下二・用　補動・八四・体（結）（尊）語り手→義仲

⑭今井四郎　ただ　一騎、　五十騎　ばかり　が　中へ　駆け入り、　鐙
副　副助・程度　格助・体修　格助・方向　ラ四・用

踏ん張り　立ち上がり、　大音声　上げ　て　名乗り　ける　は、
ラ四・用　ラ四・用　ガ下二・用　接助・単接　ラ四・用　過・体　係助・提示

「日ごろ　は　音　に　も　聞き　つ　らん、　今　は　目
係助・区別　格助・対象　係助・同類　カ四・用　強・終　現推・終　係助・区別

に　も　見　給へ。　木曽殿　の　御乳母子、　今井四郎
格助・対象　係助・同類　マ上一・用　補動・八四・命（尊）兼平→敵　格助・体修

兼平、　生年　三十三　に　まかりなる。　さる　者　あり　と　は、
係助・同類　係助・区別　格助・変化　ラ四・終（謙）兼平→敵　連　ラ変・終　格助・引用　係助・提示

鎌倉殿　まで　も　知ろしめさ　れ　たる　らん　ぞ。　兼平
副助・範囲　係助・強意　サ四・未（尊）兼平→頼朝　尊・用（兼平→頼朝）　存・体　現推・体　係助・強意

討つ　て　見参　に　入れよ。」
タ四・用（促音）　接助・単接　格助・対象　ラ下二・命

と て、　射残し　たる　八筋　の　矢　を、　さしつめ　引きつめ
格助・引用　サ四・用　完・体　格助・体修　格助・対象　マ下二・用　マ下二・用

さんざんに　射る。　⑮死生　は　知ら　ず、　やにはに　敵　八騎　射落とす。
形動ナリ・用　ヤ上一・終　係助・区別　ラ四・未　打・用　副　サ四・終

⑯その　後　打ち物　抜い　て、　あれ　に　馳せ合ひ、　これ
代　格助・体修　カ四・用（イ音）　接助・単接　代　格助・場所　八四・用　代

に　馳せ合ひ、　切つ　て　回る　に、　面　を　合はする　者
格助・場所　八四・用　ラ四・用（促音）　接助・単接　ラ四・体　接助・単接　格助・対象　サ下二・体

と言って、粟津の松原へ馬を走らせておいでになる。

⑭今井四郎はただ一騎で、五十騎ほど（の敵）の中に駆け入って、鐙を踏ん張って（馬の鞍から）立ち上がり、大音声を上げて名乗ったことには、

「日頃は（私のことは）うわさにも聞いていることだろうが、今はその目で御覧なされよ。木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平、当年三十三歳になり申す。そういう者がいるとは、鎌倉殿でも御存じのことでありましょうぞ。兼平を討ち取って（その首を、鎌倉殿に）お目にかけよ。」

と言って、射残した八本の矢を、（弓に）つがえては引きつがえては引き、矢継ぎ早に射る。⑮生死のほどは分からないが、たちどころに敵を八騎射落とした。⑯その後は、太刀を抜いて、あちら（の敵）と馳せ合い、こちらと馳せ合いして、斬って回ると、面と向かい合（って戦）う者はいない。⑰分捕りもたくさんにしたのだった。⑱

ぞ　なき。　⑰分捕り　あまた　し　たり　けり。　⑱ただ、
係助・強意(係)　形ク・体(結)　副　サ変・用　完・用　過・終　副

「射とれ　や。」
ラ四・命　間助・呼掛

と て、　中 に　取りこめ、　雨 の　降る　やうに　射　けれ　ども、
格助・引用　格助・場所　マ下二・用　格助・主格　ラ四・体　比用　ヤ上一・用　過・已　接助・逆確

鎧　よけれ　ば　裏　かか　ず、　あき間　を　射　ね　ば　手
形ク・已　接助・順理　カ四・未　打・用　格助・対象　ヤ上一・未　打・已　接助・順理

も　負は　ず。
係助・強意　八四・未　打・終

⑲木曽殿　は　ただ　一騎、　粟津の松原　へ　駆け
係助・区別　副　格助・方向　カ下二・用

給ふ　が、　正月二十一日、　入相　ばかり　の　こと　なる
補動・八四・体(尊)語り手→義仲　接助・単接　副助・程度　格助・体修　断・体

に、　薄氷　は　張つ　たり　けり、　深田　あり　と　も
接助・添加　係助・提示　ラ四・用(促音)　存・用　過・終　ラ変・終　格助・引用　係助・同類

知ら　ず　して、　馬　を　ざつと　うち入れ　たれ　ば、　馬　の
ラ四・未　打・用　接助・理由　格助・対象　副　ラ下二・用　完・已　接助・順偶　格助・体修

頭　も　見え　ざり　けり。　⑳あふれ　ども　あふれ　ども、　打て
係助・同類　ヤ下二・未　打・用　過・終　ラ四・已　接助・逆確　ラ四・已　接助・逆確　タ四・已

ども　打て　ども　はたらか　ず。　㉑今井　が　行方　の　おぼつかな
接助・逆確　タ四・已　接助・逆確　カ四・未　打・終　格助・体修　格助・体修

さ　に、　振り仰ぎ　給へ　る　内甲　を、　三浦　の
格助・理由　ガ四・用　補動・八四・已(尊)語り手→義仲　完・体　格助・対象　格助・体修

（敵は）ひたすら、

「射殺せよ。」

と言って、中に取り囲んで、雨が降るように（矢を）射たけれども、鎧がよいので（矢は）裏まで届かず、（鎧の）透き間を射当てないので、傷も負わない。

⑲木曽殿はただ一騎で、粟津の松原に駆け入りなさったが、正月二十一日の日暮れ時分のことであるうえに、薄氷が張ってはいるし、深田があるとも知らないで、馬をざっと乗り入れたところ、（深田に沈み込んでしまい）馬の頭も見えなくなった。⑳（鐙で馬の腹を蹴りつけて）あおってもあおっても、（また、鞭で）打っても打っても、（馬は）動かない。㉑今井の行方が気がかりで、（義仲が）振り仰ぎ（後ろを御覧）なさった内甲を、三浦の石田次郎為久が、追いすがりざま（弓を）引き絞って、ぴゅう、ぷつっと射止めた。㉒深手なので、（義仲が、甲の）

石田次郎為久、追つかかつて　よつぴいて　ひやうふつと　射る。
ラ四・用(促音)　接助・単接　カ四・用(イ音)　接助・単接　副　ヤ上一・終

㉒痛手なれば、真向を　馬の　頭に　当てて、
断・已　接助・順理　格助・対象　格助・体修　格助・対象　タ下二・用　接助・単接

うつぶし給へる　ところに、石田が　郎等二人
サ四・用　補動・八四・已(尊)語り手→義仲　完・体　格助・時間　格助・体修

落ち合うて、つひに木曽殿の　首をば　取つ
八四・用(ウ音)　接助・単接　副　格助・体修　連語(格助・対象＋係助・強意)　ラ四・用(促音)

てんげり。㉓太刀の　先に　貫き、高く　さし上げ、大音
連語(完・用(撥音)＋過・終)　格助・体修　格助・場所　カ四・用　形ク・用　ガ下二・用

声を　上げて、
格助・対象　ガ下二・用　接助・単接

「この　日ごろ　日本国に　聞こえ　させ　給ひ
代　格助・体修　格助・場所　ヤ下二・未　尊・用(為久→義仲)　補動・八四・用(尊)為久→義仲

つる　木曽殿を　をば、三浦の　石田次郎為久が　討ち
完・体　連語(格助・対象＋係助・強意)　格助・体修　格助・主格　タ四・用

奉つたるぞ　や。」
補動・ラ四・用(促音)(謙)為久→義仲　完・体　係助・強意　間助・呼掛

と　名乗り　けれ　ば、今井四郎　いくさ　し　ける　が、これ
格助・引用　ラ四・用　過・已　接助・順理　サ変・用　過・体　接助・逆確　代

を　聞き、
格助・対象　カ四・用

「今　は　誰を　かばはん　とて　か、　いくさ　を
係助・区別　代　格助・対象　八四・未　意終　格助・引用　係助・反語(係)　格助・対象

真っ向を馬の頭に当ててうつ伏せになられたところに、石田の郎等が二人（その場に）走り寄って、ついに木曽殿の首を取ってしまったのだった。㉓（石田が、義仲の首を）太刀の先に貫いて高く差し上げ、大音声を上げて、

「この日頃日本国中に知れ渡っていらっしゃった木曽殿をば、三浦の石田次郎為久がお討ち申したぞ。」

と（勝ち）名乗りを上げたので、今井四郎は（敵の軍勢と）戦っていたところが、これを聞いて、

「今となっては、誰をかばおうとて戦をもする必要があろうか。これを御

もすべき。これを見給へ、東国の殿ばら、日本一の剛の者の自害する手本。」

係助・強意 | サ変・終 | 当・体(結) | 代 | 格助・対象 | マ上一・用 | 補動・八四・命(尊・兼平→敵) | 格助・体修 | 格助・体修 | 形動ナリ・語幹 | 格助・体修 | 格助・主格 | サ変・体 | 格助・体修

と言って、(自分の)太刀の先を口にくわえて、馬から真っ逆さまに飛んで落ち、(自らの太刀に)差し貫かれて死んでしまった。㉔こうして、粟津の戦いという(華々しい)ものはなかったのであった。

と、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。㉔さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

格助・引用 | 格助・体修 | 格助・対象 | 格助・場所 | マ四・用 | 格助・起点 | 形動ナリ・用 | 夕上二・用 | ラ四・用(促音) | 接助・単接 | 係助・強意(係) | サ下二・用 | 完・用 | 過・体(結) | 副 | 係助・強意(係) | 格助・体修 | 係助・区別 | 形ク・用 | 過・已(結)

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 源平の合戦について、知っていることをあげる。
❷ 源平の合戦の経緯を説明し、ここでは誰と誰が戦っているのかを明らかにする。
❸「平家物語」の中で木曽義仲はどのような武将として描かれているか調べる。知技(1)ア

❶中学で習ったことや、アニメ、漫画、ドラマ化されたものなどから、知っている人物名をあげさせる。

❷歴史の知識の補足説明→平家を都から追い出したのは義仲であり、その専横を嫌う後白河法皇が、頼朝に義仲を討つように命じ、頼朝は弟の義経を義仲討伐に差し向けた。ここでは源義経対木曽義仲という源氏同士の戦いであることを確認しておく。
❸「倶利迦羅落」では、知略に長けた大将としての義仲が、「猫間」ではマナーも知らぬ田舎者としての義仲が描かれる。そのような義仲の異なる面が描かれているところと比較しながら読ませるとよい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「古文を読むために6」を参考にし、頻出の敬語の意味と用法、その他の重要語句を古語辞典で調べる。知技(1)ウ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❷ 音便や敬語の読み方に注意し、全文を正確に音読する。知技(1)エ・(2)エ 思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❸ 義仲の装束や物の具について調べ、合戦のイメージをつかむ。

❹ 義仲についての記述と巴・兼平についての記述をそれぞれ文中から抜き出し、そこに表れている心情を読み取る。思判表B(1)イ 主態
→**「言語活動」1**
(1) 巴との別れのときの義仲と巴
(2) 主従二騎になったときの義仲と兼平
(3) 義仲と兼平のそれぞれの最期を遂げたとき
以上の部分に、どのような心情が表れているか、考える。

❶本文中に敬語が多いので、スムーズな読みと理解のために先に

語句の解説をしておく。尊敬語・謙譲語・丁寧語の区別をしておくことで、主語を考える手がかりになる。ただ辞書を引くだけでなく、多義語は文中での意味をよく考えさせる。

【評価】 敬語の意味と用法、重要語句を調べることを通して、我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・敬語の意味と用法、重要語句を調べることを通して、古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、確認する。

❸ 必要なら最初に範読をする。特に促音便は「つ」の表記が大きいままなので注意する。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・正確に音読することを通して、時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・正確に音読することを通して、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、確認する。

❹ 平安末期のこのころは、鎧・甲・太刀などが最も華やかな作りであった。動きの多い合戦場面で、華やかな物の具をイメージすることから、絵画的な楽しさも感じることができる。便覧やビデオ教材などがあれば活用したい。これらの装束は色や素材など、地位によって違いがあり、このいでたちが敵の地位の判断基準ともなったのである。

❺ (1)　巴との別れのとき

義仲「おのれは、疾う疾う、女なれば…」→巴への愛情

巴　なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、「あつぱれ、よからう敵がな。…」→義仲への愛情

〔愛による生がテーマ〕

(2)　主従二騎になったとき

義仲「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が…」

「…一所でこそ討ち死にをもせめ。」

兼平「…臆病でこそさはおぼしめし候へ。」

馬より飛び降り、主の馬の口に取りついて…

(3)　義仲と兼平のそれぞれの最期のとき

義仲「さらば。」とて

兼平　大音声あげて名乗り

義仲が深田にはまり、最期を遂げたとき

義仲　あふれどもあふれども…今井が行方のおぼつかなさに

兼平「今はたれをかばはんとてか、いくさをもすべき。」

義仲→乳母子兼平への信頼、兼平→主の名誉を思う忠誠

〔愛による死がテーマ〕

まず、それぞれの場面で、それぞれの人物についてどのように書かれているか、文中から抜き出させる。巴に対してはあくまで武士の名誉を守ろうとする義仲だったが、これは巴を逃がすための説得であったと思われる。義仲にとっては巴は女性であり、命を守るべき相手であった。その一方で、兼仲と二人に

なったとき初めて弱音を吐くところに注意させる。乳母子の兼平は、義仲にとって死を共にする相手なのである。しかし、兼平はあくまで主君の名誉を守ろうと必死になる。また、義仲が敵に討たれたのも、兼平の身を案じて振り返ったところを射抜かれたということ、兼平は義仲が討たれたことを知って自ら自害したことから、二人の心の結びつきの強さを感じ取らせたい。

【評価】 登場人物の心情を読み取ることを通して、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

・進んで音読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解し、学習課題に沿って、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしているか、分析する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 前の時間にまとめた義仲と巴・兼平についての記述から、これらがどのような人物として描かれているか考える。また、彼らの言動の中で共感するところがあるか話し合う。 主態

❷「古文の窓5」も参考にし、音便や文の調子に注意しながら、内容をふまえて朗読する。 知技(2)オ 思判表B(1)ア

❸ 参考「祇園精舎」を読み、「木曽の最期」から読み取れる「諸行無常」「盛者必衰」について考える。 思判表B(1)エ

❶「平家物語」が語り物という形で大衆に親しまれてきたことをふまえ、義仲はなぜ英雄なのか、巴は？　兼平は？　と考えさせる。最期のときに女を連れているのは恥になることや、主君を守るために命をかけることは、今の生徒には受け入れにくいかもしれないが、それはそれで素直な感想としてよい。対象は変わっても「命をかけて守りたいもの」は今も昔も変わらずにあるのではないかと、問いかけてみたい。

・感想を発表する、言語活動のワークシートを通して、それぞれの場面での登場人物の心情を深く読み取ろうとしているか、分析する。

❷ 内容を理解したことで、よりなめらかな読みが可能になり、それが文章を味わうことにつながるように朗読させる。語り物として伝えられた「平家物語」の流麗な調子を少しでも体感できるとよい。九四ページのQRコードから平曲を聞かせるのも効果的だろう。

【評価】 音読を通して、和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めているか、確認する。

・朗読する、平曲を聞くなどを通して「平家物語」特有の表現を味わい、軍記物語の文体の特徴について理解しようとしているか、確認する。

❸ 冒頭の「祇園精舎」で物語全体を貫く思想が提示され、その後

に実例が語られるという構成になっており、「木曽の最期」もその実例の一つであることを理解させる。「倶利迦羅落」で義仲が平家を討ったときの勢いある姿と比較することで「盛者必衰」が感じ取れるのではなかろうか。現代の社会状況でも「盛者必衰」は至る所に見られることを考えさせる。

【評価】「諸行無常」について考えることを通して、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

指導上の注意点と発問例

●八六ページ

問 **義仲の装束はどのような印象を与えるか。**

答 大将軍らしい威厳と、英雄の持つ華やかさを感じさせる。

補 赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧という華やかな衣装に、甲も太刀も弓矢も大将にふさわしい立派なものを持っている。たくましい馬に置いた鞍も豪華なものである。最後の合戦にふさわしいいでたちであるが、武士にとっての晴れの場といえる戦においては、それぞれの立場にふさわしいいでたちがあり、それで敵の立場を判断していた。

●八七ページ

問 **「頭高に」（12行目）とは、どのような様子を述べているか。**

答 「語句の研究」参照。

問 **「聞こゆる」（12行目）は、ここではどのような意味か。**

答 「評判が高い。名だたる」「世に知れている」の意。

問 **「鬼葦毛」（13行目）の「鬼」はどのような意味合い（印象）のある接頭語か。**

答 「語句の研究」参照。

問 **「あますな」（6行目）の「あます」とは、どのような意味か。**

語句の研究

●八六ページ

10木曽左馬頭　源義仲。源為義の二男義賢の子。二歳のとき、同族の争いで叔父義朝の子義平に父を討たれ、逃れて木曽の中原兼遠に養育された。治承四（一一八〇）年、以仁王の令旨を受けて挙兵し、北陸路から進出して、寿永二（一一八三）年五月、越中礪波山で平家の大軍を破り、七月には平家を追って入京を果たした。しかし、「朝日将軍」と呼ばれて華々しく登場した義仲も、後白河法皇を中心とする貴族政界との対立を生じ、さらに、九州大宰府に一度落ちた後、四国屋島を回復し備中方面に進出した平家に水島の戦いで敗れるなどして、急速に孤立した。同年十二月に鎌倉の頼朝に義仲追討の院宣が下り、頼朝が派遣した範頼・義経軍に討たれたのである。このとき、五万騎をもって入京したとされる義仲軍は、瀬田を守る今井兼平が八百騎、宇治橋に五百騎、下流の淀・一口に三百騎が派遣され、京の義仲は僅か百騎余の手勢を従えるのみと記されている。関東軍六万騎に対して、あまりの凋落ぶりであった。

10その日の装束には…　以下の武装の描写には、堂々と力強い感じの中にも、豪華・華麗な印象がある。武装の描写は、なかなか具体的に想像できるものではないが、身分の高い武将が身につける中国伝来の唐綾威の鎧や石打の矢などで大将軍らしさを演出しているところを読み取りたい。なお、義仲が初めて入京する場面（巻八「山門御幸」）の武装も、ほとんどここと同じで、語り手は義仲のイメージを一貫して描いているようである。装束の描写が詳しいのは、身分や年齢によって材質や色などに違いがあり、お互いにそれを目安に相手の実力をはかって、自分にふさわしい敵か否かを判断していたためでもある。「には」は状態の格助詞「に」＋強調の係助詞「は」から成る連語。

10唐綾威　「唐綾」は中国伝来の、模様を浮き織りにした絹織物。唐綾威はこれを細長くたたみ、鎧の札（鉄または革で作られた小板）をつづりあわせたもの。身分の高い武将が着用した。

10直垂　ここは、鎧直垂のこと。「直垂」は、平安時代末頃から貴族や武家の常服として着用されたが、その小さめのものを鎧の下

問 **「もらす」（6行目）とは、どういう意味ですか。**
答 「語句の研究」参照。

問 **「縦さま、横さま、蜘蛛手、十文字に駆け割って」（8行目）とは、何の、どのような様子か。**
答 「語句の研究」参照。

補 **少人数の木曽軍の、敵の大軍を相手に縦横無尽に駆け回って戦う様子。**
答 敵の大軍をある時は縦に突っ切り、ある時は横に遮り、八方へ広がるかと思えば、縦横に同時に動きと、言葉通りに訳すとこのようになるが、状況に応じて臨機応変に隊形を変え、巧みに攻める様子を表している。戦闘の様子を形容する決まり文句ではあるが、数を示すことでその圧倒的に不利な状況がはっきりと表されている。

問 ●**「主従」とは誰のことか。**
答 木曽義仲、今井四郎、巴、手塚太郎、手塚別当。

問 **「人手にかからば」（15行目）とは、ここではどのような意味か。**
答 敵につかまって殺される。

問 **「しかるべからず。」（1行目）について、**
答 **(1)「べから」の文法的意味を答えよ。**
(2)「しかる」の示す内容を明らかにせよ。
(1)適当　(2)木曽殿が最後の戦に女を連れて

に着用した。特に赤地の錦の直垂は、大将軍が用いるものとされていた。

10 錣形　甲の正面に付けられた、角のように突き出た金属製の飾り。威容を示す。

11 いかもの作りの大太刀　大きく堂々と見えるように作った太刀。「いかもの」は厳めしげに作られたものの意。鎌倉時代以降、刀や鎗などを使った戦いが激しくなるにつれて太刀は長大化した。

11 石打ちの矢の　鷲などの尾の両端の羽（石打ち）を矢羽（矢の上端に付ける羽根）とした戦闘用の矢。大将軍が用いるものとされた。「矢の」の「の」はいわゆる同格の「の」で、「その日の…残つたる」（11）の部分は、「矢」についての補足説明になっている。「木曽の鬼葦毛といふ馬の」（同・12）の「の」も同じ。

12 頭高に　箙（えびら）に矢を入れて背負う際に、左肩の上に高く出して、前から見えるようにするのをいう。

12 負ひなし　「なす」は「あえて…する、意図的に…する」の意を添える補助動詞。

12 重籐の弓　弓の幹に黒漆を塗り、その上に籐を巻きつけたもの。

12 木曽の鬼葦毛　「木曽の」は「木曽に産する」の意。「鬼」は強いことを表す。「葦毛」は馬の毛色で、黒色や濃褐色の毛に白い毛が混じったもの。

13 黄覆輪の鞍　黄覆輪は金覆輪に同じ。周縁を金でふちどりした鞍。

● 八七ページ

1 鐙　鞍の両脇にさげ、馬に乗る際に足を踏み掛ける道具。

1 鐙踏ん張り立ち上がり、大音声をあげて名乗りけるは…をめいて駆く　軍記物らしい勇ましい木曽義仲の姿が描かれているところである。名乗りは戦における古くからの風習で、だいたいの形が決まっており、武人としての自分をアピールして、自分にふさわしい好き敵を探し出し、勝負を挑むために行われた。この、敵に向かったときの勇ましさは、後半の、今井四郎と二人になったときとを比較するために、押さえておきたい。

2 昔は…、今は…　「は」は二つ以上のことを対比的に述べる係助詞。

2 木曽の冠者　「冠者」は「元服して冠を着けた若者」のことを言うが、「無位無官の者」の意で言うこともある。義仲は、巻四「源氏揃」で最初に名が出てくるところで

いたと言われること。

問　**「疾う疾う」（14行目）は、どこに掛かるか。**

補　**答**　行け。

「おのれは、女なれば、疾う疾う、いづちへも行け。」となるのが普通であろう。前へ置いたことで「疾う疾う」が強調される。「女なれば」と「いづちへも」が間に入ることに惑わされず、「疾う疾う」は副詞的に働いて、用言に掛かることを思い出すようにする。

●八八ページ

問　**◉「なほ落ちも行かざりけるが」（3行目）とあるが、ここでの巴の心情はどのようなものか。**

答　巴は離れがたい思いだが、何度も説得され、別れを決意する。できれば主従として最後まで一緒に戦いたいという心情。

補　多勢に無勢の中、力を合わせて、最後に残った五人であること。義仲が死を覚悟していることから想像する。

問　**「あまりに」（3行目）を現代語訳しなさい。**

答　何度も

問　**「言はれ奉つて」（4行目）について、**
[中](1)　「れ」の文法的意味を答えよ。
[難](2)　「奉つ」は誰から誰への敬意を表しているか。

答　(1)受身　(2)作者から木曽殿

も、「木曽冠者義仲」と言われている。

2伊予守　伊予（現在の愛媛県）の国主。義仲は無位無官であったが、寿永二（一一八三）年の入京後、後白河法皇によって伊予守に任ぜられた。

2朝日の将軍　巻八「名虎」では、寿永二（一一八三）年八月十日、「木曽は左馬頭になつて、越後の国を賜はる。その上、朝日の将軍といふ院宣を下されけり。」とある。「左馬頭」は当時の記録にあるが、「朝日の将軍」はなく、義仲の自称であろうかと言われる。ただし、寿永三年一月には「征夷大将軍」の院宣を下されている。

3甲斐　現在の山梨県。

3一条次郎　甲斐源氏の武将。頼朝方。

3兵衛佐　兵衛府の次官。ここでは、後に鎌倉幕府初代の将軍となる源頼朝（一一四七年〜一二九九年）のこと。頼朝は平治元年（一一五九）に右兵衛佐に任ぜられた。

5をめいて　「をめく」は大声で叫ぶこと。

6あますな　「あます」は、余分なものとして残す、余らせることで、「取り残す、取り逃がす」の意に用いる。

6もらすな　「もらす」は、水や粒状のものを、隙間や穴から落としたり、こぼしたりすることで、「取りこぼす、取り逃がす」の意に用いる。

9土肥二郎実平　相模の国足柄下郡土肥郷（神奈川県足柄下郡湯河原町）の住人。頼朝が挙兵したときから従った相模平氏の一族で、侍大将格の有力な武将。

10支へたり　「ささふ」（支ふ）は、物を押さえて持ちこたえることで、「敵に応戦して防ぎ止める」意に用いる。

12巴　義仲は信濃の木曽から、身の回りの世話をする女性として巴と山吹の二人を伴って入京した。巴は美貌で武勇に優れ、たびたび手柄を立てたといわれている。

14疾う疾う　早く早く。「疾く疾く」のウ音便形。巴を急かす義仲の気持ちが表れている。

15人手にかからば　「人手にかかるようならば、むしろ自害をしようと思う」。「人手にかからずば」とある異本があり、その場合は前文の「討ち死にせんと思ふ」を受けて「討ち死にしない場合は自害をするつもりだ」となる。いずれにしても「自分はここで死ぬつもりだ」の意。

15木曽殿の最後のいくさに…しかるべからず　「最後のいくさ」に「女を具」すことはな

問　**「あつぱれ」（5行目）という語の成り立ち、用法を述べよ。**

答　「あはれ」を促音化して、語気を強めたもの。（「あはれ」を強く発音し、促音化したもの）。感情を一気に表すときに用い、「ああ」「おう」「すばらしい」などの意を示す。

問　**「よからう敵がな。」（5行目）について、**
[中](1)「よからう」を文法的に説明せよ。
[易](2)「がな」の文法的意味を答えよ。
[中](3)全体を分かりやすく現代語訳せよ。
[難](4)巴がこのように考えたのはなぜか。

答　(1)形容詞「よし」の未然形に婉曲の助動詞「ん」が付いてウ音便化したもの。(2)願望 (3)戦うにふさわしい敵がいてほしい。(4)木曽殿と別れる前に家臣として立派に戦う自分の姿を見せたかったから。

問　**「物の具」（12行目）とは、どのようなものことか。**

答　鎧、甲などの武具。

問　**この場面からうかがわれる巴の人物像はどのようなものか。**

答　女性でありながら戦場で男性と同様に戦うことができ、木曽殿をよく理解している人物。

補　「五騎がうちまで巴は討たれざりけり。」（八七・12）から、多勢に無勢の圧倒的不利の中でも生き残ったことが分かり、義仲はぜいけないのか。「女を具」した状態は武将を中心とする武士団が組織として機能していないことになるから、潔い武人の死を「最後のいくさ」に期している義仲としては、卑怯未練と見られるということであろうか。表向きの理由はともかく、これは、最期まで従者として付き添うつもりである巴を逃がすための、口実の言葉であると考えられる。巴が武人として優れていても義仲にとっては女性であり、やはり助けたいという気持ちがあったのだろう。本文の前段部分で容貌も大変美しいが、「一人当千のつはもの」であり、乗馬も巧みであると紹介された男勝りの巴には、義仲が迷惑と言う表面上の理屈も、その言葉の裏にある愛情も分かったはずである。ここは一方で「平家物語」の構造として、義仲の最期を後世に語り伝える巴がどうしても生き長らえなければならないところなので、その設定のための文言ともいえる。

●八八ページ

1しかるべからず　「しかるべし」は①そうなるよう定まっている（「べし」は当然）。②そうなるのがよい。適当である（「べし」は適当）。ここは②。

4奉つて　「たてまつりて」の音便形「たてまつつて」のつづまった形。

5あつぱれ　「あはれ」を促音化して語気を強めた語。

5よからう　「よからん」の音便形。「ん」は婉曲の用法とみる。

7武蔵の国　現在の埼玉県・東京都および神奈川県の一部。

8恩田八郎師重　諸本によって住国や呼称に異同が多く定め難い。「武蔵の国」ならば大里郡恩田（埼玉県熊谷市）の住人。

10前輪　鞍の前面の山形に高くなっている部分。「後輪」の対。

11はたらかさず　身動きさせず。

11捨ててんげり　「てんげり」は完了の助動詞「つ」連用形＋過去の助動詞「けり」の「てけり」に撥音を挿入し、意味を強めたため、「けり」が濁音化した連語。軍記で主に用いられた。

12物の具　一般に道具・調度品の類をいうが、軍記では鎧、甲などの武具を指す。

12手塚太郎　手塚太郎光盛（巻七「実盛最期」）。手塚氏は、信濃の国諏訪神社下社の祝部、金刺氏の一族。「手塚の別当」の子とも、甥とも言う。

との別れに際しても、女々しく泣くでもなく「最後のいくさして見せ奉らん。」（5行目）と、怪力で名高い恩田八郎師重の首をねじ切って見せるというところから、女性でありながら武士としてたくましい力強さを持った人物として描かれていると分かる。

問 **木曽殿と巴は、最後にどのような思いを伝え合っているか。**

答 木曽殿は無事に逃げおおせてほしいと思い、巴は自分がともに戦ってきたことを忘れないよう最後に華々しい戦いをしてみせようと思った。

問 **第二段落以降の場面で登場する人物は、どのような関係にあるか。**

答 〈木曽方〉木曽殿（義仲）・今井四郎兼平（義仲の乳母子）↑敵対↓〈鎌倉方〉敵五十騎・石田次郎為久と郎等。

補 本文全体の人物関係を把握させ、状況を理解させる。

● 八九ページ

問 **今井四郎が義仲に「松原へ入らせ給へ。」（9行目）と言ったのは何のためか。**

答 義仲に自害させるため。

補 義仲を逃げさせようとしているのではないことに注意させる。

問 **「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が、今日は重**

13 手塚別当　手塚太郎の叔父。

14 今井四郎　今井四郎兼平。信濃権守中原兼遠の第四子で、兄の樋口次郎兼光とともに、義仲の乳母子として、いわゆる木曽四天王の一人として多くの戦闘で活躍した。寿永三（一一八四）年のこのとき、本文では三十三歳とあるが、三十二、三十四歳とする異本もある。義仲と今井との関係は「木曽殿の御乳母子、今井四郎兼平」とある。

● 八九ページ

1 日ごろは…重うなつたるぞや　武勇の誉れの高い武将という栄光に包まれていた義仲が、戦場において敗残の我が身を見いだしたときに、すっかり心の張りを失って傷つき弱ってしまった状態になっている。鎧という武士の象徴が重く感じられるということは、武人としての自分を失いかけていると言える。武将にあるまじき気弱な言葉を口にするところに、乳兄弟の兼平を求めて、京から敵の大手の大軍がいる瀬田に向かった義仲が、すでに人間の情愛の世界に身を置く私人に返ってしまっていることが感じられる。

3 御身もいまだ疲れさせ給はず　兼平は、この言葉の最後にあるように、もはや義仲に残された道は武将として名誉の自害をするしかないと知って、弱気な言を吐いている義仲を励まして、武将としての身の処し方を全うさせようとしている。それは、義仲のための盾となって戦うことに武人としての最期を賭けている兼平にとっても、自らを励ます言葉であったろう。「御身」の「身」は、人や動物の身体のこと。

3 一領　「領」は「衣服の襟」の意から転じて、衣装や鎧を数える数詞。

4 着背長　大将軍用の大鎧の別称。騎馬で用いるために草摺が長く、背中から着けて右脇で合わせるところから、この名がある。

4 臆病でこそ　気後れして。

6 防ぎ矢　味方が別の行動を取るのを援護するために敵に矢を射ること。

6 粟津の松原　義仲は、宇治橋の守りを突破した義経軍が京になだれ込んで来たのに対して、なすすべなく逃れて、大津の打出の浜で、瀬田から退却してきた兼平と出会ったことになっている。粟津は打出の浜からは東の方で、瀬田に戻ることになるので、瀬田を攻めた関東軍の大手、範頼軍が京へ向かう背後に出ようとしたという位置関係である。

うなつたるぞや。」（1行目）とあるが、義仲がこのように言った理由を説明せよ。

答　一番信頼する今井四郎と二人だけになったので、緊張が解けて弱気になったから。

問　「御身もいまだ疲れさせ給はず。御馬も弱り候はず。」（3行目）とあるが、兼平がこのように言ったのは、どのような気持ちからか。

答　疲れ果てた義仲を励まそうとする気持ち。同時に、そのことによって折れそうな、自分の心を支えようとする気持ちがある。

問　「兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。」（5行目）と兼平が言ったのは、何のためか。

答　義仲が味方の無勢もあって気弱になったと思い、義仲を力づけるため。

問　◉「いかにもなる」（11行目）とは、具体的にはどのようになることか。

答　死ぬこと。

補　「どうなってもいい」は現代でも「死んでもいい」の意味に用いることがある。

問　義仲が都を逃れてこの地まで来たのは、何のためか。

答　今井四郎と同じ場所で死ぬため。

補　義仲の言葉の内容を読み取らせる。彼はあくまで兼平と共に戦って死にたいのである。

問　(1)義仲が、兼平と死のうと思ったのはなぜ

8打つて行くほどに　（馬に）鞭を打って走らせて進むうちに。

8新手の武者五十騎　この言い方から、孤軍をもって奮闘し、今や心身ともに萎え落ちようとしている義仲主従に対して、関東方は、次々に新手の全く疲れていない将兵をつぎ込めるわけで、この戦いのどうしようもない彼我の差を印象づけている。戦い疲れた義仲主従に対して、「新手の」と言ったところに、心理的に重い意味合いがあろう。

11いかにもなる　「どのようにでもなる」の意で、命のある限り戦ってその場で死ぬこと。

11なんぢと一所で死なん　物語は、関東軍に敗れた義仲が、長坂（京都の北山、鷹峰から杉坂へ向かう道）を越えて丹波方面へ行くか、竜花越え（大原の北、途中峠）をして北陸へ向かうかと想像されていたのに、「今井が行方」が知りたくて、瀬田に落ちて行ったとしている。長坂越えや竜花越えは、武将として再起を企図する道であったわけだが、瀬田はいわば死地であって、このときの義仲は、骨肉の思いに生きる一個の自然児として行動していると言える。義仲の心にあったのは、「幼少竹馬の昔より、死なば一所で死なんとこそ契りしに、ところ〴〵で討たれん事こそかなしけれ。今井がゆくゑを聞かばや。」（「河原合戦」）という気持ちだけであった。

12ところどころ　「別々の場所」。これに対して、「一所」「ひとところ」は、共に「同じ場所」の意。

14馬の鼻を並べて駆けんとし給へば　兼平といっしょに敵勢に向かって斬り込もうとしたことを言う。「鼻」は「鼻先」の意で、ここは、兼平の馬と向きを同じにしたこと。

14馬の口　馬のくつわを取り付けた部分。

● 九〇ページ

1弓矢取り　「弓矢を取る者」の意で、武士を指すのは、当時、武士の技量は太刀の技よりも弓矢や乗馬の腕前が重んじられたことによる。

1いかなる高名候へども　「どんな手柄を立てておりましても」。「ども」は条件と結果の一般的恒常的な逆接関係を示している。「…ても必ず～」という仮定に近い用法である。

2長きき ず　いつまでも残る不名誉。ここでは、死ぬ時に油断して失敗すると後々まで

か。(2)また、**義仲の兼平に対するどのような気持ちがうかがわれるか。**

答 (1)兼平は義仲の一の家来で、強い主従の絆で結ばれている。二人は乳兄弟としての情愛によっても結ばれており、互いに、死なば一所で、と誓い合った仲であるから。(2)実の兄弟と思うほどの深い愛情。

●九〇ページ

問 **「最後のとき不覚しつれば、長ききずにて候ふなり。」（1行目）とは、具体的にどのようなことを言うのか。**

答 敵の名もない郎等に首を取られると、名高い武将でも不名誉な死に方になって、後々まで非難されること。

補 「不覚」「長ききず」の意味を確認し、状況に当てはめて考える。

問 ◉**「御身は疲れさせ給ひて候ふ。」（2行目）と、今井四郎兼平が前とは逆のことを言ったのはなぜか。**

答 共に戦おうとした義仲を自害に導こうとしているから。

補 前は、弱気になった義仲に自害する気力を取り戻させるため励ましたが、ここでは義仲が敵と戦おうとしたので、その余力がないことをはっきりと示して、改めて自害に導こうとしている。

問 **「口惜しう候へ。」（5行目）という兼平の**

恥辱となることを案じている。

3押し隔てられ　敵に押しやられて二人が離れ離れになること。

3言ふかひなき人の郎等　「人の郎等」で「誰かの家来」の意。「郎等」は、主人と血縁関係のない家来で、血縁関係のある家来の「家の子」とは区別する。「言ふかひなき」は「郎等」に続く。ここからも、不釣り合いな敵に討たれることが不名誉であることが分かる。

4それがし　誰それ。①名前の不明な人を漠然と指す、②故意に名前を伏せる、③名前を示す必要が特にない、などの場合がある。ここは、③。

5なんど　副助詞「など」と同じ働き。代名詞「なに」＋格助詞「と」の「なにと」の音が変化したもの。

12乳母子　ここは、義仲を養育した中原兼遠の子を意味するが、それもやはり「乳母子（＝乳兄弟）」の関係で、武家社会では、主従関係の中で、肉親に準ずる絆で結ばれた、強い結び付きを意味する。

13まかりなる　「まかり」は、謙譲の動詞「まかる」の連用形が他の動詞の上に付いて、謙譲の気持ちを添える用法。「まかりありく」「まかり老ゆ」など。今井の名乗りは義仲と似ているが、直後で「さる者…見参に入れよ。」と自分が「好き敵」であることを強調し、敵の気を自分に引こうとしていることが感じられる。また義仲と違い、頼朝に対して敬語を用いている。

13鎌倉殿　源頼朝。

14見参に入れよ　兼平は敵に向かって、自分を討って頼朝の御覧に入れよ、と言っている。義仲が「義仲討つて兵衛佐に見せよや」（八七ページ）と言ったことと呼応している。

15八筋　「筋」は細長いものを数える数詞。「もと光る竹なむ一筋ありける。」（「竹取物語」）

15さしつめ引きつめさんざんに…あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つて回る　これら、同語・同音の繰り返しは兼平がただ一人で目まぐるしく立ち働くさまを印象づける表現である。下文には、「追つかかつてよつぴいてひやうふつと射る。」の促音で畳み掛けて、力動感を高める表現があり、語り物の戦闘描写の特徴がこの段でもよく表れていると言えよう。「さしつめ」の「さす」は弓に矢をつがえること。「引きつ

言葉にはどのような気持ちが込められているか。

答 武士たるものが最期のときに不覚をとってはならぬという義仲への愛情。

問 **「今井四郎、木曽殿、主従二騎になつて…：粟津の松原へぞ駆け給ふ。」（八八・14～九〇・9）の段で、**
[中](1)**兼平の願いとは何か。**
[難](2)**また、兼平がそのように願ったのはなぜか。**

答 (1)主人義仲が松原の中で立派に自害すること。(2)戦う余力もなく、主従二騎となっては、自害によってしか義仲の名誉を守れないから。

問 **義仲が松原へ駆けて行った後、兼平がたった一人で勝ち目のない戦いをしたのはなぜか。**

答 義仲に自害させるための時間を稼ぐため。

問 [難](1)**兼平が名乗りをあげるいちばん初めに、自分は「木曽殿の御乳母子」（12行目）だと言っている。そこには兼平のどのような気持ちがこもっているか。**
[中](2)**この言葉から分かる義仲と兼平の関係を説明せよ。**

答 (1)自分は義仲の第一の家来であり乳兄弟なのだという誇りと、義仲への敬愛。また、自分が相手にとってよき敵だとアピールし、

め」の「引く」は弓を引くこと。「つめ」は連続した動作を示す接尾語。「さんざんに」は容赦のない激しさを表す擬態語。

15死生は知らず 「死んだか生きているかは分からないが」。一説に、「自分の命を顧みることなく」。

●九一ページ

1やにはに 名詞「矢庭（弓矢による戦いの場）」から生じた、「その場ですぐに」「たちどころに」の意の副詞。

1打ち物 「打ち鍛えて作った物」の意で、刀や長刀（なぎなた）の類の総称。

4分捕り 敵の武具を奪うことにも、敵の首を討ち取ることにも用いる。本文注は、前者に従う通説を取ったが、一説に、敵の首を取ることとする（岩波古語ほか）。「生捕（いけどり）分捕思ひ思ひにぞしける。」（「義経記」）

7裏かかず （鎧の札が丈夫なので、矢が）鎧の裏まで貫通しない。

8あき間 鎧の札の間などにあるすき間。

8手も負はず 「手を負ふ」は負傷すること。兼平は敵の矢を受けても負傷しなかった。

10正月二十一日 「玉葉」「愚管抄」「吾妻鏡」などは、正月二十日のこととする。

10入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたり けり 「入相」は日没、たそがれ時。「ことなるに」の「に」は接続助詞で「…のうえに」と添加する意を表す。日没頃の薄暗さに加えて、薄氷の張っていたことが、深田があることに気づかない（「深田ありとも知らず」）根拠となっている。

11張つたりけり 「張っていることではあり」。「けり」は、終止形の中止法的用法で、強い語気で畳み掛ける感じを出すもの。

11深田 泥の深い田のこと。冬や春先も水の引かない湿田を言う。泥田。

13あふれども 「あふる（アオル）」は、鎧で障泥（あふり）（鞍の下から馬の両脇腹に垂らした泥よけ）を蹴ること。

14打てども 「打つ」は、鞭で馬の背をたたくこと。

15おぼつかなさ 「おぼつかなし」は、「ぼんやりしていて様子がよく分からない」の意から、「不安だ、気がかりだ」。

●九二ページ

1内甲 甲の内側。額の部分。

1三浦の石田次郎為久 頼朝方の武将。石田の住人である三浦氏の次郎為久。「石田」は相模国の地名。現在の神奈川県伊勢原市。

1追つかかつて 「追つかかり」は「追ひか

敵の注意を自分に向けようとする気持ち。
(2)主従であり、かつ兄弟同然の関係。単なる主従以上の深い情愛で結ばれている。

問　今井四郎の戦いぶりはどのように描かれているか。

答　一人で五十人の敵を相手に奮戦する。矢を射れば百発百中、矢がなくなると刀で戦い、敵の武器を奪う。あまりに強いのでまともに向かってくる敵はいない。敵は今井を射殺そうとするが、矢の腕が劣り、今井の鎧が上等なのでけがもさせられない。

補　「兼平一人候ふとも、余の武者千騎とおぼしめせ。」（八九・5）との言葉通りの戦いぶりだが、これは義仲の自害の時間を稼ぐために奮戦していることに留意する。兼平の戦いぶりをテンポよく描くことで、悲劇の場面に変化を与えていることにも着目させる。

●九一ページ

問　義仲が深田にはまってしまったのはなぜか。

答　冬で、田に薄氷が張っていたから。夕暮れで薄暗く、よく見えなかったから。

補　正月二十一日・入相が単に時間を示したものではなく、義仲が討ち取られる原因を作ったことに注意させる。

●九二ページ

問　「振り仰ぎ給へる」（1行目）について、(1)誰が、なぜ振り仰いだのか。(2)その結果どうなったか。

答　(1)義仲が、兼平の行方を気に掛けたから。(2)内甲を矢で射られてしまい致命傷を負った。

問　義仲が討ち取られた経緯を順を追って書け。

答　(1)深田にはまって抜け出せなくなった。(2)今井はどうしたかと振り返った。(3)石田次郎に内甲を射抜かれた。(4)致命傷だったので馬の背にうつ伏せになった。(5)石田が刀で義仲の首を取った。

補　深田にはまって抜け出せなくなったこと、今井はどうしたかと心配して振り返ったことが、討たれた原因であることを把握できればよい。

問　●「聞こえさせ給ひつる」（6行目）の「聞こえ」は、どのような意味か。

答　世に広く知られている、の意味。

補　「聞こえ」は下二段動詞「聞こゆ」の未然形で、「自然に耳に入る」の意。ここは、広く評判になっていること。

問　「今は誰をかばはんとてか…」（9行目）とあるが、誰をかばっていたのか。

答　義仲。

補　今までかばっていたものがなくなったということから考える。

問　「さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。」かり」の促音便形。「かかる」は「動作が途中まで進む、相手に及ぶ」という意を添える補助動詞。

2 よつぴいて　「よくひきて」の音便形。

2 ひやうふつと　矢を放ったときの慣用的な擬音語。「ひやう」は矢が風を切って飛ぶ音、「ふつ」は矢が物に当たった音。

2 痛手なれば、真っ向を…　「痛手」は重傷、「真向」は甲の鉢の前面のこと。義仲は為久に射られて重傷を負い、甲の前面を馬の頭に押し当ててうつ伏せになった。

3 石田が郎等二人落ち合うて　石田為久が義仲を弓で射て、さらに討ち果たそうとしているところに、石田の郎等が追い付いて加勢をしたのである。つまり、下文の「首をば取つてんげり。」の主語は、石田為久と見られる。孤立無援の義仲に対して、郎等二人を加勢に得た石田の優勢を物語っている。「落ち合うて」は、「その場で出会って。合流して」。戦場の描写では「その場に来て加勢する」の意になる。今井が心配していた「言ふかひなき人の郎等に…なんど申さんこと」（九〇・3）の通りになってしまったことに気づかせたい。

4 取つてんげり　「取りてけり」の音便形

（13行目）という結末にはどういうことが示されているか。

答 強力な東国軍に対するほんの一握りの抗戦でしかなく、両軍入り乱れて華々しく戦う合戦と呼べるほどのものではなかったことを示している。

問 **「木曽の最期」において、作者が描きたかったのはどのようなことと考えられるか、簡潔に答えなさい。**

答 義仲・巴・兼平主従の互いを思いやる美しい情愛。

問 **臨場感のある描写になっているのは、どのような書き方によっているか。**

答 具体的な数字を多用していることと、擬態語が効果的に用いられていること。

「取ってけり」に「ん」が加わった形。

10剛の者　強くて勇敢な者。優れた勇士。

13貫かつて　「貫かりて」の音便形。「貫かる」（四段動詞）は「貫く」に対する自動詞の形。兼平は自ら太刀に貫かれて死んだ。

13さてこそ粟津のいくさはなかりけれ　日本古典文学大系の頭注の、「それで結局、粟津の合戦と名づけるようなはなばなしいものはなかったのである。」とする解に従った。義仲が自害のために入っていった場所が「粟津」の松原なので、ここでは二人しかおらず、義仲も討たれ、今井も自害したので、戦というものにはならなかった、という解釈である。諸本では、「…いくさはかてにける。」「…やみける。」などとあるところから、「合戦は終わった」とする解も多い。「さて」は義仲・兼平主従の討ち死にを指すが、「いくさはなかりけれ。」の解釈には、この二類があるので、これらを紹介しながら、「さて」についても考える必要がある。

鑑賞

僅か二歳で父を殺され、「是いかにもしてそだてて人になしてみせ給へ。」（巻六「廻文」）という母の必死の頼みを受けた木曽の中原兼遠の助けによってようやく人となることを得た義仲であるが、以仁王による平家追討の令旨によって、治承四（一一八〇）年九月に挙兵するやたちまちに力を得て、寿永二（一一八三）年五月には倶梨迦羅峠、篠原の戦いで平家に大勝し、七月末には京を平家に替わって支配する。正に風雲児と呼ぶにふさわしく義仲は運命の階段を駆け上ったのであったが、滅亡への道も早く、入京してから半年の後には敗死の日を迎える。山田孝雄氏は「平家物語」を三部に分け、一部の清盛、三部の義経に対して、義仲を第二部の主人公に擬する（「平家物語考」）が、更に小松茂人氏は義仲物語には三部の展開があるとする（「義仲・義経」「国文学」所収、昭和三三・九）。すなわち上洛までの義仲は「まことに知仁勇兼備の名将として『朝日将軍』の名にふさわしく描かれる」のに比して、上洛後には一転して、「無知・無風流の田舎者として、清盛につぐ悪行者」とされるが、最期を迎える第三部では人間愛に富み、「浪漫的英雄として美化され」、「典型化された理想的英雄像とは異なり、内面的に認められている」と言う。義仲像には

「平家物語」内部において敬語法に差があるなどの矛盾があることは五十嵐力氏（「軍記物語研究」）以来指摘され、水原一氏（「平家物語の形成」）はこれを形成基盤の異なる説話が合成されたために生じたものとするが、私たちがこの「木曽の最期」を読むに当たっては、そうした義仲像の変遷もさることながら、主人公がわずか半年前に五万余の兵を率いて入京したばかりの英雄であることに留意すれば足りるであろう。

範頼と義経とに率いられた鎌倉方の軍勢六万余騎が、勢田川・宇治川の線まで押し寄せたとき、義仲の手勢は二千に足らぬものであった。平家を追って入京したときの五万騎に比べると、信じられないほどの寡勢である。兼平の兄樋口次郎兼光の勢は十郎行家を追って紀伊国にあったとしても、都の貴族政界の支持を失い、備中国で、屋島から中国地方に進出した平家と戦った水島合戦に敗れた義仲を見限って、多くの軍団が離脱していったことによるわけで、都を武力で維持することの困難を克服する政治力を、義仲は持たなかったのである。このような成り行きの背景には、この時期の慢性的な不作のために都は深刻な食料不足の状況にあったことがあり、統制の取れていない五万の軍勢が、自分たちも思いがけないスピードで上京を果たした悲劇だったわけだが、物語は、そうしたいっさいの事情には触れずに、ただ「折ふし、勢もなかりけり。」（巻九、生ずきの沙汰）と言って、「木曽の最期」を、純粋に一個の武人の末路の悲哀として語っている。

義仲が六条河原で死線を脱したとき、義経軍の敏速な行動力の前に、義仲が武将として再起を図る手立て、例えば、後白河法皇を擁して都落ちするというような可能性は断たれてしまった。それでもなお、人々は、義仲が長坂越えか、竜花越えによって、北国へ向かう再起の道を行くだろうと想像した。ところが、義仲は、「今井が行方を聞かばや」という思いに駆られて、瀬田へ向かう。瀬田は、今井勢八百余騎を、鎌倉方の大手、範頼の指揮する三万五千騎が攻めている、義仲にとっては死地でしかない。あえて死地に赴く義仲は、既に武将としてのありようから抜け落ちて、木曽の山中で少年の日を共に過ごした兼平と最期の時を共有することだけを期する、一個の人間に戻ってしまっているのである。

ひたすら死を期して戦う主従の叙述は、「木曽三百余騎」が敵「六千余騎」の中を縦横に疾駆する様に始まり、数詞を重ね、ついに「主従五騎にぞなりにける。」まで、単純な事実をもって臨場感を盛り上げた、巧みなものである。その「五騎」になるまで従った女武者の巴に対し、義仲は武士の名誉を保つためという言葉で離脱させているが、これは巴を逃がすための口実であろう。巴がどんなに優れた武人であっても、義仲にとっては命を守るべき一人の女性であったと言える。その一方で、物語的には、木曽殿の最後の戦の細部にわたる具体的な事実の真実らしさは、この巴の存在により間接的に保証されていることになるのである。

木曽殿は、戦の終わりに、兼平と二人になって「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。」と言う。我が事の既に終わったことを自覚する者の一種の満足を表す言葉である。兼平はこれを臆病のゆえと言い、なお励まして自害を勧めるが、それは彼の主の名誉を思う真情に出たことで、真実義仲を臆病と思ったわけではない。義仲は兼平と一所に死ぬことが最後の望みであるのに対し、今井には主を敵に討たしてはならないという情が

あった。しかし、そのような今井の判断は、あくまで兼平を一所で死ぬべき友人としてのみ求め続ける義仲の人間的な情愛に裏切られ、義仲は敵に名をなさしめ、口惜しい最期を遂げる。「平家物語」の世界では、主従・親子等の誓い合った者は一所に死ぬというのが武士の一つの道徳になっており、義仲にとっては乳母子の兼平に対する骨肉の情愛がそれを求めさせたのである。愛情によって生き延びさせた巴と、愛情によって共に死を願った今井、対照的ではあるが、どちらに対しても義仲が人としての情愛を求めたことに違いはない。武将としての名誉の自害をという兼平の願いに反して、無残な敗死を遂げてしまったところに、義仲の、木曽の山中で人となった自然児らしい人間味が現れ出ていて、最期に武人になりきれなかった哀れを見事に印象づける場面となっている。「祇園精舎」で述べられた盛者必衰のことわりの具体的な例としてもさることながら、平家物語の文学性とも言える、愛による生と死が矛盾なく語られる多様性もきちんと読み取らせたい。